

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「現代世界の分断と共生の検討：イスラーム・ジェンダー学のアプローチから」
(2024年度第2回研究会)

日 時：2024年7月23日（火）16:00~19:30

場 所：東京外国語大学本郷サテライト／Zoomによるオンライン同時開催

報告者：村上薫（アジア経済研究所、AA研共同研究員）

内 容：

司会：高橋圭（AA研共同研究員・東洋大学）

課題について：後藤絵美（AA研研究員・課題代表）

報告1：黒木英充（AA研研究員）

「多数派と少数派：何がどのように問題なのか」

報告2：森千香子（AA研共同研究員・同志社大学）

『ライフ』への着眼から見えること」

全体討論

第二回研究会は、「カテゴリー」を大テーマとして黒木英充氏と森千香子氏を報告者に迎えた。黒木報告『多数派と少数派：何がどのように問題なのか』は、「あるべき市民社会」のために、数的に多数でも優越的支配的集団から抑圧を受ける立場をマイノリティとみなし、その権利の承認と確保、そのために枠組みや社会の基盤づくりを考察するというIG学における議論を踏まえ、歴史学の立場からマジョリティとマイノリティについて考察した。最初に①「マイノリティの保護」は帝国主義期の植民地統治勢力の介入の口実となった、②民主主義社会における意思決定手段としての多数決が危険な方向をもたらすこともあった、③国家の成立過程で多数派と少数派が形成されるという問題、という三つの問題提起がなされた。フランス委任統治期のシリア・レバノンの宗教・宗派別人口の状況と新たな国境の策定に伴う多数派と少数派の形成の事例紹介に続き、多数決原理の歴史性や、Eric Weitzの「パリ体制」論（一次大戦後に成立した、少数派の保護と文明化の使命、人道主義、強制移動、ジェノサイドが同時進行する体制）など、「少数」と「少数派」を論ずるうえで有効な視点が紹介された。質疑では、マイノリティとしてカテゴリー化することの権力性（植民地主義的な意図）、マジョリティ・マイノリティをつくる軸の複数性や非自明性などについて議論が行われた。

続く森報告『『ライフ』への着眼から見えること』では、仏アカデミズムにおけるマイノリティへの隠された差別にたいする報告者の実感や、最近の総選挙での右派勝利を糸口に、フランスの政治空間で広がっているムスリム移民への様々な意味での攻撃（公立学校でのアバヤ着用禁止、新移民法など）、それが人々の日常（Fassin2018の生命およびバイオグラフィーとしての「ライフ」）に与える影響を考察し、「カテゴリー」をめぐる三つの問いを導出した。まず、ムスリム・フランス人（ミドルクラス）の国外流出現象を紹介し、マジョリティ、マイノリティだけでなく、内なる他者 *outsider-within* という固有の問題の存

在を指摘し（問1）、アルジェリア移民二世で教育を通じ階層上昇を果たしたNさんのライフヒストリーから、この二十年間の自己規定の変化（フランス共和主義の理想像から、ムスリム性の受容、フランスの否定とルーツの模索へ）を取り上げた。さらに、カテゴリーの生産的な議論に向けて、「同じ概念」が異なる文脈でどのような意味を持ちうるのか（問2）、「分析カテゴリー」と「実践カテゴリー」を区分する必要性（問3）という二つの問いが提出された。質疑では、自己規定の変化をもたらす要因としてフランスにおけるマイノリティを取り巻く政治環境の苛烈さ、ドレフェス事件がユダヤ人に与えた影響とシャルリー・エブド事件がムスリムに与えた影響の比較可能性、フランスのユダヤ人の状況、左翼のイスラモフォビア言説などに議論が及んだ。

全体討論では、実践カテゴリーと分析カテゴリーの区別に関連して、当事者によるマイノリティ性の利用と、研究者がマイノリティとしてラベリングすることは別であること、後者には慎重さが求められること、またマジョリティも一枚岩ではなく複数性や多様性に留意することの重要性が提起された。今回の研究会全体を通じて、マジョリティとマイノリティという、大きなテーマを考えるための多くの手がかりが得られた。会の最後は、今後も誰もが考えたいことを、それぞれの事例を通して考える場にしたいという代表者の後藤氏の言葉で締めくくられた。